HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	建築社会研究は東日本大震災とどのように向き合うのか
Author(s)	森, 傑
Description	人間・環境学会第18回大会、2011年5月21日、名古屋大学 東山キャンパス、名古屋市
Citation	人間・環境学会誌, 14(2), 11-12
Issue Date	2011-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48430
Type	journal article
File Information	MERA J_ 14(2)_11-12.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

建築社会研究は東日本大震災とどのように向き合うのか

森　傑
北海道大学大学院工学研究院
suguru-m@eng.hokudai.ac.jp

建築社会研究委員会は、人々の日常生活の質に直接的に関わる建築の今日的役割や意義について、私たちが今まさに生きている社会という観点から学術的に再考することを目的とし活動を継続してきている。2011 年 5 月 21 日に開催された人間・環境学会第 18 回大会において、当委員会は、ワークショップ「建築社会研究は東日本大震災とどのように向き合うのか」を主催した。このワークショップでは、建築社会研究は未曾有の災害という現実をどのように受け止めることができるのか、建築社会研究が議論してきたこれまでの学術的想定はこの歴史的災害にも通用するのだろうかという問いを軸に、東日本大震災を目の前にしたときの建築社会研究の存在意義を考える機会として開催、研究あるいは学術的活動のリアルな社会性について議論を深めることを目指した。本特集は、ゲストスピーカーおよび建築社会研究委員会メンバーが、当日の議論を振り返りながら改めて当該テーマについて考察した寄稿論文を集めたものである。

キーワード：建築社会研究，東日本大震災，学術，調査，実践

How do we face the Great East Japan Earthquake as Architecture-Society Studies

Suguru Mori
Faculty of Engineering, Hokkaido University
suguru-m@eng.hokudai.ac.jp

The committee of Architecture-Society Studies works on meaning or role of architecture directly related to our quality of daily life with academic reconsideration from the viewpoint of society. The committee proposed and held the workshop "How do we face the Great East Japan Earthquake as Architecture-Society Studies" in Annual Meeting of Man-Environment Research Association on May 21st, 2011. We aimed to make the workshop as an opportunity to consider the reason for being of Architecture-Society Studies in a social emergency. In this workshop, we had deep discussions based on some queries. How does our Architecture-Society Studies face with the reality of this unprecedented disaster? Can our academic assumptions handle facts in the most disastrous earthquake on record? This feature is a collection of contributions by the speakers and members of this workshop.

keywords: architecture-society studies, the great east japan earthquake, discipline, survey, practice

1. 主旨説明

「建築社会研究委員会」は、2011 年 5 月 21 日に開催された人間・環境学会第 18 回大会において、ワークショップ「建築社会研究は東日本大震災とどのように向き合うのか」を主催した。本特集は、ゲストスピーカーおよび建築社会研究委員会メンバーが、当日の議論を振り返りながら改めて当該テーマについて考察した寄稿論文を集めたものである。

建築社会研究委員会は、前身の「建築社会学を考える委員会」が設置された 2005 年度以降、人々の日常生活の質に直接的に関わる建築の今日的役割や意義について、私たちが今まさに生きている社会という観点から学術的に再考することを目的とし活動を継続してきている。特に近年は、連辞符社会学という位置づけではなく、建築と社会の不可分な関係性に注目する学際的取り組みとしての Architecture-Society Studies の構築を模索している。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災は、私たちに未曾有の経験をもたらし、9 ヶ月を経た現在でさえ具体的な復興再建は始まっていない。直接的な津波被害のなかった地域でも、震災の影響は放射能やエネルギー不足など日常生活に支障をきたすレベルで深刻化している。いうまでもなく、私たちが直面している危機的な社会は、この大震災とその後の未来である。

建築社会研究は東日本大震災とどのように向き合い、未曾有の災害という現実をどのように受け止めることができるのか。建築社会研究が議論してきたこれまでの学術的想定は、この歴史的災害にも通用するのだろうか。ワークショップ「建築社会研究は東日本大震災とどのように向き合うのか」は、東日本大震災を目の前にしたときの建築社会研究の存在意義を考える機会として開催し、研究あるいは学術的活動のリアルな社会性を軸に議論を深めることを目指した。

2. 本特集の構成

本特集は、上述の主題に対して、以下の 4 つのアプローチで構成している。

(1) 災害実態調査の意義と価値（坂口，野村）

災害実態調査の第一の目的は正確な被災状況を把握することであるものの、それにより得られる情報の活用目的によって、研究分野ごとに調査の意義や価値の認識に差が見られることが、ワークショップにおいて指摘された。特に、調査実行のアプローチの仕方に研究分野ごとの姿勢が如実に表れたという。また、震災直後、建築計画や都市計画の分野では調査公害を意識した慎重論が広がった。被害や避難の実態把握は何のため誰のために行うのか。初動調査を中心とした実施プロセスにおける社会的な課題をレビューする。

(2) 研究対象としての災害（定池，小池）

学術研究は、その成果が実社会において役に立つことを迫られるものではない。しかしながら、災害を研究対象とする場合、分野ごとに程度の差はあるにせよ、何らかの被害や復旧・復興における改善が意識されているはずだ。災害を題材にして、防災や復興という社会的な価値と無縁であるという研究の立場はあり得るだろうか。社会学をはじめとする記述や解釈を志向する研究は、災害を扱うことの何に価値をおき、その成果として何を目指すのか、災害と研究（者）との距離を考察する。

(3) 研究の実用化（岩佐，森）

実学と形容される分野がある。例えば工学はその代表であり、復旧や復興の現場において専門家として活動している研究者も少なくない。しかし、専門家と研究者は決して同意ではない。現場で求められる役に立つ研究成果は、論文や報告書と何が異なるのか。また、研究者が復旧・復興の現場で専門家として求められる活動に、研究者であることの必然性はあるのか。被災地を支援するための研究成果のあり方を軸に、広義の実用化を議論する。

(4) 東日本大震災を研究する意味（小松，舟橋）

災害は千年に一度ではなく、常にどこかで頻繁に起こっている。過去の研究から何を学び何に備えることができたのかを、渦中だからこそ冷静に省察すべきである。結局、災害を対象とした研究は何のために行うのか。そして、建築社会研究は東日本大震災をどのように消化するのか。調査公害という問題、そこには非常時の社会状況と研究という独特の価値認識との本質的なギャップがあるのかもしれない。未曾有の災害がもたらす研究観への影響について考察する。

本特集の論考は、大会ワークショップで掲げた問いに十分に答えうるものではないが、建築社会研究を生産的に反省する議論を持ち得たこと自体に大きな意義があると考える。本特集が、人間・環境学の内省と再定位の契機になれば幸いである。